

亡くなる直前に他機関に 援助を依頼されてしまい、 わだかまりが残っているケース



事例提出者

Uさん (訪問看護ステーション・看護婦)

提出理由

5年以上にわたり訪問看護で週1回訪問していたケース。その長いかかわりのなかで、自然と孫の成長と一緒に楽しむような、遠い親戚よりも親しい身内のような関係を築いていた。

ところが、終末期のある日、クライアントのKさん(女性、68歳)より、「Jステーションからも訪問に来てくださるそうですので、お願いしました」との言葉。JステーションはKさんが退院した当初かかわっていた事業所であるが、当時担当していた方が退職されたのにもとない、当ステーションに訪問依頼がきていた。

その頃、Kさんの状態は悪化する一方で、精神的に不安定な時期だった。娘さんに対しても機嫌が悪く、厳しい口調になっていた。だが、娘さんは「なんとか家で看たい」と言い、ご本人も「入院はしたくない」という意向が強かったため、自宅での介護を続けることにした。

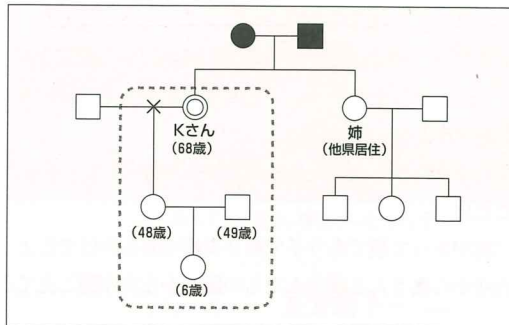
そんななか、事例提出者は「Jステーション

からの援助で精神面が安定することを期待する」として、大切な最後の2週間を、その気になれば自分の訪問回数を増やすことも可能であったのに、Jステーションに任せるかたちでかわりを減らしてしまった。事例提出者は、その2週間が今も気になっている。

事例

氏名：Kさん、女性、68歳

病歴：骨粗鬆症、緑内障、リウマチ、間質性肺炎(平成6年)、帯状疱疹(平成8年10月、平成12年4月)、間質性肺炎急性増悪(平成12年4月、11月)、帯状疱疹急性増悪(平成12年5月)
家族・生活歴：娘親子(娘、娘の夫、孫)と同居。自身は若い頃に離婚している。





スーパーヴァイザー・奥川幸子氏を招いて開かれた事例検討会の模様を紹介します。(検討会及び事例の内容は、誌面の都合及びプライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました)

間質性肺炎による入院を終えて、在宅生活に移行したとき(平成7年6月)、孫は生後5カ月であった。

親族は、姉の家族と娘の夫の家族を把握しているのみ。

Kさんの性格は、明るく話し好き。病気になるまではスナックを経営していた。物事を極力前向きに考える努力をする人である。

訪問開始当初の援助内容：主治医(呼吸器の医師)が月1回訪問。訪問看護婦(事例提出者)が週1回訪問。

援助の経過

平成6年5月、間質性肺炎のため入院。多量のステロイド投与で一命を取り留める。

平成7年6月、HOT(在宅酸素療法)で在宅療養となる。Jステーションによる訪問開始。退院時、ADLは問題なしとされていたが、実際には歩行不安定で室内歩行がやっとであった。息切れや咳の不安をもちながら、徐々に廊下歩行や隣室への歩行もできるようになり、浴槽に入ったり洗面等も可能となった。

平成7年11月、Jステーションに代わり、当ステーション(事例提出者)が訪問するようになる。

12月、「入院中はどうやって息をしたらいいかわからなかった。食事をとったり笑ったり、咳をするのもつらかったが、今は自然にできるようになった。少しずつ楽になってきている。「幸せ」とか「元気」という言葉が出てくる」。

平成8年10月の帯状疱疹は、Kさんに大きなダメージを与えたが、11月には痛みが消え、座位・立位がスムーズにとれるようになる。

平成9年には、2歳になった孫娘と遊ぶ時間を増やし、少しでも娘の役に立ちたいとADL、QOLの面でも向上が見られた。訪問のたびに、「笑えるようになった。身体もよくなってきた。どう、元気になったでしょう?」とおしゃべりして過ごす。しかし、咳は続き、肩甲骨部や側胸部痛も訴えているなど、完全な回復とはいえない状態だった。

平成10年に入っても、咳は続いていた。Kさんは、訪問のたびに「元気になった、元気になった」と明るく振る舞っている。無理に元気を

出しているようにも感じられたが、実際、この頃の血液のデータは安定しており、6月には姉の家族と温泉に1泊旅行をした。

平成11年にも、4月、7月と温泉旅行に出かけた。訪問の時は、楽しかった思い出話やいろいろな昔話を聞き、咳の状態を観察して過ごした。風邪は内服薬で改善する程度で、CRP（C反応性蛋白）の上昇もなく過ぎた。

上記の期間を通じて、外来通院は月1回の割合で、緑内障は眼科、帯状疱疹はペイン外来、神経痛は気功に通院していた。通院介助はJステーションのヘルパーが担当していた。

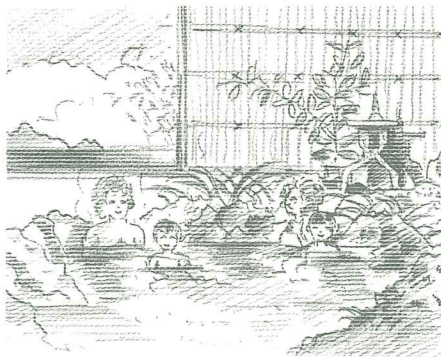
平成12年1月、「2000年を迎えることができ嬉しい」。

2月、血液ガスのデータが悪化。10歩ほどのトイレ歩行で呼吸を整えるようになる。臥位から座位をとるのもつらそうである。歩行の際も、軽い動作をするだけで咳き込みがある。安静にしていれば呼吸が楽になるのはわかっているが、自分の身の回りのことで娘に負担をかけないよう努力していた。

咳の状態は変わらず、呼吸も安定していなかった。かねてから予定していた旅行に行くのはどうかと心配したが、本人はとても楽しみにしており、その様子を見ると「中止したほうがいい」とは言えなかった。無事に1泊旅行ができた。

3月、咳が続く。喘息のようである。だが、本人はいたって楽観的。

4月、熱が38.5℃まで上がる。CRP、LD



H（乳酸脱水素酵素）ともに上昇。間質性肺炎の急性増悪を来す。在宅で抗生物質とプレドニンの点滴治療を行い、血液データが改善する。その後、帯状疱疹を再発。皮膚科医師による往診。

6月、下肢腫脹、しびれ、咳、痰あり。「気分が明るくなる薬はないかしら」と落ち込む。「うっとおしい、腹が立つ」とも。

7月、訪問のたびに「あーしんどい」を連発。右下肢痛で動きが思うようにならず、鎮痛剤の使用が増える。

介護保険の申請を行い（要介護3）、Jステーションのケアマネジャーにケアプラン作成を依頼（事例提出者の訪問看護ステーションは病院併設の事業所で、居宅介護支援事業所の指定をとっていない）。介護保険を利用し、電動ベッド、手すり、入浴サービスを依頼。

8月、涙もろくなっている。

9月、眼科医師、ペイン医師、歯科衛生士の往診を受け、「ありがたい」と喜ばれる。

10月、極力安静にしている必要があるが、ポータブルトイレの使用は固く拒否し、トイレへ

自力で歩いていく。ゲップが頻回にあり、食事摂取困難。点滴で対応。

11月、血液ガスデータ悪化、バイタルサインは安定しており、会話もしっかりしているが、トイレへの歩行が困難になる。自力で排泄ができなくなったため、尿道留置カテーテル挿入のための入院をもちかけるが、訪問看護で対応してもらえるならば、このまま在宅で生活したいと希望される。

平成13年1月、点滴、清潔、排便のケアのため毎日訪問するようになる。だが、「いつまで点滴するんですか。ぜんぜん楽になりません。つらいばかり。誰も私のことを助けてくれないのがよくわかりました」と精神的に苛立っており、娘に対しても厳しい口調で話すことがある。それまでも娘の介護力の弱さは感じていたが、直接Kさんが娘にきつい言葉を言うことはなかった。

21日、Kさん自らJステーションに電話を入れ、訪問依頼をする。結果、週1日を当ステーションが訪問、残り4日をJステーションで対応することになった。Jステーションの援助で精神面が安定することを期待しようと思いつつも、何か引っかかる。

26日に訪問。先日娘に教えたばかりの口腔内ケアができておらず、肛門の周囲もただれている。娘に在宅で看る意思があるのかどうかを確認すると、「お母さんがこれだけ頑張っているから、私も頑張る」。

2月3日、医師の往診。呼吸苦、水分、食事

入らず病状悪化。以後、再び毎日訪問することにする。

「息がづらい。早く楽にしてください。しんどい。でも、まあ見とってくださいよ、きっとよくなります」

アアアと呻吟し、右側臥位と仰臥位が何とかできる状態、座薬により鎮静鎮痛。

14日、会話はできないが、こちらの言葉かけにはうなずき、理解を示す。そばにいて、楽しかった温泉旅行の話をし、励ます。

17日、血尿。

20日、痙攣様の呼吸。11時と17時に訪問。20時、息を引き取られる。

事例を書き終えての感想

5年間にわたり、週に1回訪問し、経過観察をしながらたわいない会話をして過ごしてきた。時々、Kさんは冗談のように死を意識しているような話をした。

「最後のときは、あのピンクの着物を着せてね。孫が20歳になるまでは生きていたいわ」

平成7年に退院してから、Kさんは、常に元気になるとうと自分に言い聞かせながら、咳と戦い、死と向き合われていたことを、文章にして改めて感じる。

娘も幼い子どもを抱え、母親に対し精一杯接したと思う。最後にピンクの着物を着せてあげることができ、大雪のあの日は忘れられない日となった。

しかし、KさんがJステーションになぜ依頼

されたのか、またその後2週間あまりの自分の気が抜けたようなかわり方が、どうしても気になる。

ケース検討会

奥川 このケースでUさんが今いちばん引っかかっているのはどんな点ですか。

Uさん 5年以上にわたる長い付き合いだったのですが、最後の2週間、Jステーションがかわり始めたときから、自分が汚れてしまったと感じています。それがなぜだったのか、もしかしたら逃げてしまったのかもしれないという気もしています。そのあたりが、どうにもスッキリしていません。

奥川 わかりました。なぜ、最後の時期にJステーションがかかわることになったのか。その時、Uさんとクライアントとの間でどんなことが起きていたのか。それを解明するということでもいいですか。

Uさん はい。よろしく申し上げます。

奥川 では、UさんとクライアントのKさん親子がどんな状況に置かれていたのか、より詳しくアセスメントするための情報をUさんから引き出してみてください。

本人の方、娘の方

発言 Kさんは平成6年に間質性肺炎で入院されていますが、ほかに既往歴はなかったのでしょうか。

Uさん リウマチがありました。

発言 それはいつからですか。

Uさん 正確には聞いていませんが、何とか仕事はできていたようです。

発言 スナックを経営されていたということですが、お店はいつまでやっていたのですか。

Uさん 平成6年に入院されるまでやっていたらっしゃいました。

発言 どれくらいの規模のお店ですか。

Uさん Kさんがお一人でやっていたそうなので、それほど大きな店ではないと思います。

発言 離婚をされているようですが、いつ頃のことか聞いていらっしゃいますか。

Uさん 具体的には聞いていません。娘さんがまだ小さかった頃だというお話はお聞きしたことがあります。

発言 娘さんのご主人は、介護にはどの程度かかわっていらっしゃったのでしょうか。

Uさん 私が訪問するときはお仕事で不在ですので、ご主人とお話したことはないのですが、直接介護はしないにしても、娘さんがかわることにはごく普通に理解を示していらっしゃったと思います。

発言 ご本人は、ご自分の病気についてはどんなふう認識されていたのでしょうか。

Uさん 平成7年に退院されたときは、それほど重い病気だとは思っていらっしゃらなかったようです。

発言 ドクターからはどんな説明があったのでしょうか。

Uさん この先生はきちんと患者さんに説明をされる方ですが、Kさんの病気（間質性肺炎）については、予測が難しいこともあって、「こうなる」とはっきりとは説明されていなかったような気がします。

ただ、平成7年に退院されたときは、「助かって家に帰れるようになったことだけでもすごい。奇跡に近い」と、Kさんにもご家族にもおっしゃっていました。

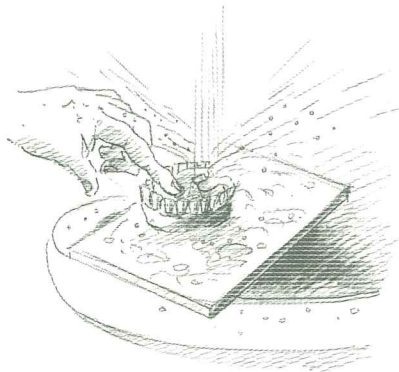
発言 どのあたりがすごいことなのですか。

Uさん 立てることもそうですし、廊下を歩いていることも驚きだ、とおっしゃっていました。

発言 Uさんは娘さんの介護力の弱さを感じていたということですが、具体的にはどんなところで感じられたのですか。

Uさん たとえば、入れ歯の手入れなどは、最後までKさんがご自身でされていました。身体が動くうちはトイレの洗面所で洗っていたようですし、ベッドから動けなくなってもティッシュで拭いたりなさっていました。

清拭をするときなども、娘さんは段取りがよくなくて、こちらが一つずつ指示をしないと物



事が進展しないという面がありました。

奥川 娘さんのお子さんは現在6歳ということですが、いつ頃のご結婚ですか。

Uさん 40歳をいくつか過ぎてから結婚されたようです。

奥川 それまでは？

Uさん 事務のパートをされていて、ずっとKさんとお二人で生活なさっていました。

発言 Kさんのお店を手伝ったりということは。

Uさん それはありません。

発言 では、パートをしながら家事をしていたという感じでしょうか。

Uさん いえ、家事はKさんがなさっていて、娘さんはされていなかったようです。

発言 Kさんが退院されてからは、食事の支度などはなさっていたのですか。

Uさん 食事の準備はされていました。Kさんも、「この子をつくる料理はおいしいのよ」とおっしゃっていました。

発言 でも、そのほかのことは……。

Uさん うまくできないんです。Kさんがうがいをするためには洗面器を用意しなければなりません、あまり気づかないのか、ちゃんとできていませんでした。口腔ケアも、そばについていて指導すると、その時はできるのですが、あとはできていませんでした。

発言 食事の用意だけで精一杯という感じなんですか。

Uさん そうですね。

発言 お子さんは順調に育っているのですか。

Uさん それは大丈夫です。すくすくと育っています。

発言 Kさんは、娘さんに対して「こうしてほしい」という思いはなかったのでしょうか。

Uさん 娘が疲れたら可哀相という思いが強かったと思います。

奥川 Kさんは、医者も驚くほどの生命力を発揮して在宅生活を続けていましたね。

Uさん はい。特に12年の4月に間質性肺炎が増悪してからは、いつ亡くなってもおかしくないような状態でした。

奥川 それにもかかわらず、Kさんは必死に生きているわけですね。

Uさん はい。

奥川 そういうお母さんの姿を見て、Uさんはどういう印象をもっていましたか。

Uさん もう、すごい頑張っているな、いつも思っていました。

奥川 娘さんはどうおっしゃっていましたか。

Uさん 「お母さんが頑張ってる姿を見せてくれているから、私も頑張れる」とおっしゃっていました。

発言 すみません。いいですか。

奥川 はい、どうぞ。

発言 事例の最初のところに「遠い親戚より親しい身内のような関係」とあるのですが、これはどんな関係なんでしょうか。

奥川 いい質問です。

Uさん そうですね。最後の数カ月を除いては、週に1回私が訪問する以外は誰も訪問して

いませんでしたし、何というかお孫さんの成長を一緒に見てきたという感じですね。

もしKさんが自分のことができなくなって、娘さんも介護をするのが難しいようだったら、私がしなければ、という気持ちもありました。

奥川 私が何をするの？

Uさん Kさんの身体のこと全部です。

奥川 なるほど。

事例提出者はどんな存在だったのか

奥川 これまでのやりとりで、完全ではありませんがKさん親子の人となり、Uさんとの関係がだんだん見えてきました。

ここからは、今日のテーマである、なぜ最後の時期になって、KさんはJステーションにケアを頼んだのかという点について意見交換をしていきましょう。ご自由にどうぞ。

発言 これは意見というより感想になってしまうのですが、娘さんはKさんに介護をさせてもらえなかったのではないかとふと思ったのですが。

Uさん たしかに、そう言われてみれば、そういう面もあります。

発言 そのときに、娘さんとUさんの関係がどうだったのかが気になったのですが。

Uさん 先ほども言ったように、一緒に孫の成長を見てきたというか……。

発言 もし、KさんがUさんを娘さんと同じような存在として感じていたとしたら、娘さんに頼めないことは、Uさんにも頼みにくいという



ことはないでしょうか。

Uさん う～ん……。

奥川 ここは大事なところなんです。Kさんは平成6年に入院し、翌年退院していますね。その後、医者が驚くほどの生命力で6年近くも生きながらえてきました。この気力、意志力をUさんはどういうふうに受け止めていましたか。

Uさん 娘さんのために本当に頑張っておられるな、でもすごくつらそうだな、と私のほうまでつらくなってくるような気持ちでいました。

奥川 そういうふうに、一緒につらがってくれている人に対して、介護をしてもらっている方が何かを頼めるでしょうか。

Uさん う～ん、そういう人には頼みにくいですね……。私は援助者というよりも、家族の一員になってしまっていたんですね。

奥川 そうですね。

Uさん 知らないうちに、娘さんのお姉さんになってしまっていたような気がします。

奥川 必ずしも、援助職者は絶対に家族になってはいけないということではないのですが、それについては後でふれることにします。

今は、この時点で援助職者に求められていた

ことは何だったのかを考えていきましょう。

本人のニーズは何だったのか

奥川 もう一度、ここまでの経緯を振り返ってみると、お母さんは娘のために頑張りに頑張りを抜いてきた。娘さんのほうも、「お母さんが頑張っているから私も頑張れる」と、娘さんなりの力で食事の準備などをしていましたね。

Uさん はい。

奥川 でも、お母さんのほうは、特に平成12年の後半からは、気力に体力がついていかない状態ですよ。だから、装いきれなくなって、イライラを娘さんにつけたりしているわけでしょう。

Uさん そうだと思います。

奥川 では、この時点でのお母さんのニーズはどんなことだったと思いますか。

Uさん 「つらい」という気持ちを素直に言える相手がほしかった、ということでしょうか。

奥川 それは、つまり別の援助職者がほしかった、ということではないですか。

Uさん それでJステーションにケアを依頼された……。

奥川 そうですね。お母さんは精神力で6年間も頑張ってきた。娘の前では精一杯演じているわけです。でも、13年1月に入ってとうとう体力がついていかなくなってきた。この両面を見抜いていくのが援助職者なんです。

Uさん 家族の一員になってしまわずに、一歩引いてみなければいけなかったんですね。

発言 でも、Jステーションにはそういうことがわかっていたのでしょうか。

奥川 それまでの経緯をどこまでおさえていたかはわかりませんが、たぶん難しいでしょうね。

Uさん 私は、Kさんが亡くなる日に2回訪問しているのですが、2回目の時は本当に胸騒ぎがして、いてもたってもいられなくなって訪問したんです。大雪の日でした。枕元で苦しそうなKさんを見ていると、自然と「娘さんはもう大丈夫だから。これ以上頑張らなくていいのよ」という言葉が口をついて出ていました。

奥川 ちゃんとやれているじゃないですか。お母さんに引導を渡せているんだから、それでいいんですよ。

Uさん (涙声になって) もう、すごくしんどそうだったんで……。

奥川 Kさんたちの本当の家族になったんですね。

Uさん 約束どおり、最後にピンクの着物も着せてあげました。Kさんの代わりにお孫さんの結婚式に出る約束もしました。

奥川 そういう間柄だったUさんの言葉を聞いて、Kさんも安心して亡くなることができたと思いますよ。

発言 聞いているほうまで涙が出てきてしまいます……。

奥川 どうですか、Uさん。どうして最後にJステーションに援助依頼がいったのかは解明できましたよね。

Uさん はい。ほかのケースではこういうこと

はないのですが、私がKさん親子の家族になってしまっていたからです。自分に原因があったのに、私はJステーションに焼きもちをやいてしまったりして、恥ずかしいです。

奥川 Uさんはむしろ、Jステーションに対して、こういうことをしてください、と言える立場だったんですよ。

家族になるということに関しては、十分にアセスメントをした上で、あえて援助職者がクライアントの家族になるという援助の方法もあります。しかし、それはどちらかという裏技に近いもので、こちらに相当の力量がないと、かえって火傷をしてしまいます。Uさんの場合は、知らず知らずのうちに家族になってしまっていたという点では、援助職者としてみれば必ずしもよかったとはいえませんが、このケースに関しては、家族になっていたUさんがお母さんに引導を渡せたのですから、結果的にはいい援助だったんです。

それに、お母さんのほうからも、Uさんを訪問看護婦ではなく、家族の一員、娘のお姉さんにさせる力が働いていたような気がしますよ。それにしても、このお母さんはすごい人ですね。

発言 本当にそう思います。Uさんの報告のなかにも、娘さんに対する愛があふれていると感じました。

Uさん 私自身、たくさんの大切なものをいただいたような気がしています。今日は、ずっともやもやしていたことをスッキリさせていただき、本当にありがとうございました。